報身觀の宗教心理的基礎

鈴木大拙

古來三身と云ふ事が屢々論ぜらるゝが、其の中の報身なるものは一體如何なる宗教心理學的根據を有するであらうか。

三身の中先づ最初に擧げらるゝものは法身であるが、此れは佛八十年の生涯を終りても猶滿足出來ない或るものとして理解出來るやうに思はれる。かゝる考は基督教に於いても認めらるゝのであつて卽ち基督が蘇みがへつて昇天したと云ふ思想がそれである。支那でも老子はその終るところを知らず、或は化して仙となつたとも云ふ。或る意味から云へば、こうなるのが本當であらう。死んでゆくのは凡人だけで偉人は決つして死ぬべきものではない。應身もわからぬ事はない。法身を立つる以上應化するところのものがなければならぬ。茲に化身が出て來る。もとは法應二身であつた事は事實らしい。此の間へ報身なるものが入つて來た。然らば何故此の間へ報身が入らねばならなかつたか。報身が出て來たに就いてはそこに充分なる理由があるに違ひない。

楞伽經の本文では報身佛を Nisyanda-Buddha としてある。Nisyanda とは流れると云ふことである。報身に就いては種々の解釋があるやうであるが、大體(一)法身佛から流れ出た佛、(二)もとあ

つたものゝ變化したもの、(三)法の報として出て來たもの等と解されてゐるやうである。眞宗で阿彌陀佛は報身だと云ふが、何故應身や法身にしなかつたのか、何故報身にしなければならなかつたのであらうか、此れは面白い問題だと思ふ。

印度に業說がある。此れは何かそこに一働きが行はれたならば、其の結果は永久に死なずに殘ると云ふ思想である。一體一度やつた事は永久不滅に殘る殘らぬと云ふ問題は隨分面倒な問題で、因果說など持出して種々考へられてゐるが、果してそれで說明がつくかどうかはわからぬ。わからぬが兎角一般的に云つて働きがあればそれが永遠に生きて殘ると云ふ思想は佛敎に於いて大切な問題である。而して此れを押し詰めてゆくと茲に報身觀が出て來る。先づ業と法身とを結びつけて考へてみる。業の考よりすれば佛の修行には其の結果が出て來なければならぬが、法身だとするとそれは空々漠々で考へやうがない。應身でも化身でも說明がつかぬ。佛の修行が實を結ぶと云ふならそれはどうしても報身でなければならぬ。然らば其の實は何處の世界で結ばるゝか。それは此の世界ではいけない。楞伽經には「色究竟天に於いて阿耨多羅三藐三菩提の果を成ず」と書いてあるが、これはどうしても此の世界を離れた超物的世界でなければならぬ。そこで Sambhoga の意味がわからう。Nisyanda は流れると云ふ意でなくて實を結ぶと云ふところから考へねばならぬ。つまり vipāka 異熟の義である。

佛教には大切な考が三つある。第一は業である。此れは身口意の三業すべて我々のやつた事は死ないと云ふ考である。從來の佛教者達は此れに就いては餘り深く押し進めてゐないやうで、我々が未來へゆくか報身佛になるか報土へ生まるゝかを云はないやうに思ふ。その世界は物的世界であるやうにも思はるゝし、目に見ゑない超物的世界のやうでもある。兎角科學世界の原則では說明のつかぬところである。第二は空の考であつて此れも大切な考である。空と業とは反對の考で、業は繫がれた束縛の世界であり空は束縛を離れた自由の世界である。業がなければ空がなし、空がなければ業がないと云へると思ふ。第三は悲である。束縛の世界を出たいは萬人の考であるが、只出たいだけではゆかぬ、そこに悲と云ふ働きがなければ人間は成り立たぬ。大悲の世界がなければならぬ。業と空と悲、此の三つは佛教に於ける三要素であつて、業は分別智、空は般若の智、悲は方便智であらう。そこで此の三つのものを三身に當はめて考へると、業は報身に當り、空は法身悲は應化身に當るやうに思ふ。

さて空や大悲に就いてはしばらくこれをおき、業に就いて話を進めてゆかう。我々は五官を持つてゐる以上、業の世界は經驗的に考へざるを得ない。混沌に目鼻をつけたら死んだと云ふ話が莊子にあるが、とかく目鼻がつき過ぎると死ぬやうである。目鼻がついて死んでいゝかと云ふに、死にたくはない。我々は人を見るとやがて死ぬのだと考へるが、それと同時に今が生きてゐるのだとも

考へる。こうしてゐる此の儘が常住であるやうにも思へる。元來死ぬるとか生きるとか云ふ事は我々が考へて云ふ事であつて、本不生と云ふ意は生死を離れた現實と云ふか何と云ふか般若の智を體得した世界である。こゝは只本不生としか云へず、言葉の光りでみるより致方がない。此の感じが無分別と云ふところを感じたところに、死ぬが而も死なずに不變のものが存在すると云ふ感じが生れて來る。茲に報身が出て來るのである。

我々が修行してそれが結果をもたらさず又菩薩が六波羅密を極端まで修して其の結果が何もないと云ふのでは話にならない。どうしても實が結ばれねばならぬ、報が出て來なければならぬ。更に云へば茲に報身が畫き出されて來なければならぬのである。それも至極微妙に畫き出されねばならぬが、それには光りが一番だ。昔から偉大なるものを現はすには光りがよく用ひられる。例へば紫磨黄金の佛と云ふは光ある人の義である、竹取物語の御姫樣でも光る、又佐久間玄蕃が秀吉の眉間から出る光りに打たれたと云ふ話もある。總じて光り程我々に大切なものはないのであつて、我々から光りを離して考ふる事は出來ない。兎角報身は光りで微妙に現はされねばならぬ、が然しそれ以上考へたり云つたりする必要はない。例へば極樂へ行つてからどうするのこうするのと云つたやうな事は考に入れず、只行きさへすればそれで良いと云ふところまで練れて來なければならぬ。

スヱーデンボルグに「天界と地獄」と云ふ書物がある。余り廣く讀まれてはゐないが、然し非常

に興味あり且有益な書物である。其の記述するところをみるに、天界は死んでから行く世界のやうでもあり又此の世にある世界のやうにも考へられる。而も彼自身時々天界に行き又道を歩いてゐる時にも天界を見てゐるのである。彼の目前にある凡てのものは皆シンボルになる。こう云ふ世界はスヱーデンボルグの境地に入らねばわからぬが、禪でも「御早う」と云ふのも三寶の德を讃へてゐるのだと云ひ又無量壽經に自然物を微妙に說いてあるところなど何れもスヱーデンボルグと同じ境地から出たものだらうと思ふ。此の世の外に理念の世界があるのではなく、此の世界の一々のものに理念の世界が現はれてゐるのである。兎角こう云ふ工合に考へねばならぬ氣持ちが偉人にあつたとすれば我々にも時折考へられねばならぬ。此れが報身論の基になると思ふ。

もう一つ離れて考へ心持ちの上から云ふと、業に束縛せられた此の窮屈な世界から自由な世界に出たいと云ふのが萬人の欲求である。佛は「われ法に於いて自在を得たり」と云はれてゐるが、此の境地は實にあらゆる束縛を離れた自由の世界である。而して自由を得たいと云ふ考は單に精神的のみならず物質的にも得たいのであつて、種々のものが發明せらるゝのも其のもとをたゞせば凡ての障害を取り除き差別から平等へ出たいと云ふ氣持ちからであらう。時間とか空間とか因緣とかに捕はれてゐる間は自由でない。それをどう破壞するかゞ我々の問題である。報身なら報身、色究竟なら色究竟で Enjoy する事が出來たとすれば、そは既に自在のところを得たと考へてよい。最早

そこには生死はない、因果がつまるところへつまつたのである。混沌が死んだのではなく生れ換つたのである。こう考へて來るといくらか報身のところへ出られはしないか。

基督敎に於いてもこう云ふ考がある。「我々の苦しむのは靈が肉に繫がれてゐるからである。靈が肉を離ればそこに自由を Enjoy し得る世界が開ける。此れが永遠の源である」と云ふやうな事を云つてゐるのも一つの世界を考へてゐるからであらう。極樂を感ずるのもこうした氣持ちが出て來るのであらう。淨土と云ふものはこう云ふものだと定義を下してもゆかぬし、又何ともかとも云へぬものだと片づけてもゆかぬ。どちらへもつかぬが兎角さう云ふものが要求される、それでいゝのである。それを project すると阿彌陀にも極樂にもなる。肉身以外に何か報身になるべき素質が我々にあると云ふ氣がする。印度に於いては此れが考へられたやうに思ふ。セオソフイーもさうである。兎角身體の外に何かあつて其れが永遠に生きると云ふやうな考が出て來なければならぬ。ウオードウオースの詩に、自分の出て來た天界の記憶があると云ふ詩があるが、天界の繼續がこの後にもあると思ふ。セリーの「雲雀」と云ふ詩を讀むと、鳴いてゐる雲雀の聲が天界の使のそれのやうに聞ゑると云つてゐる。こう云ふ永遠に我々を導く心持ちを追ふ心持ちが、我々に絶えずあるやうに思はれる。こう云ふ心持ちを抱いて時空を離れたものを得たい、自由な身體を得たいと云ふ事は楞伽經に書いてある。かゝるものを得たいと云ふ事それが報身の思想の前提になると思ふ。住み

たくなると殼を新に造り變へてゆくと云ふノーテラスと云ふ貝の事を詩人が歌つてゐるが、それを見ると自由にものを得らるゝだけでなくて精神的道德的目的があつて行ける所まで行かねばならぬ氣がする。不幸な身からそこに進步をみないのは眞宗の缺點かと思ふ。勤め得るだけ勤めてそこに道德的に進步する要求をしていゝ。私は嘗つて族順に戰跡を尋ねた事があるが、例へば戰死して塹壕の埋草になつた人達の事を考へてみても、犧牲になると云ふ其の人の考は先づいゝとして、他から考へると其の人達を其の儘にしてはすまぬと云ふ氣がしてならぬ。そこに何物かゞないと話がつかぬやうに思はれる。理屈の上からでなく感情の上から云つて其の人達のやつた行爲が實を結んでそこに淨土が考へられねばならぬ。こう云ふ考は皆にあると思ふ。

もう一つ考に入れておかねばならぬのは道德的行爲と幸福との關係である。幸福の定義はむつかしいが道德と幸福と何かこう一致させ度い氣持ちがする。此の二つのものが一つになつて、積善餘慶ありと云はねば滿足出來ぬ。こう云ふところからみると、報身があり色究竟天があつて其處で今まで苦しんだ者が受取られねばならぬと思ふ。然し報身なり報土なりが余り細かくはつきり畫き出されては面白くない。凡情では測り得ないが先づあるものと云ふ程度にして考へたらどうか。此等を說くにしても、我々宗敎心の要求であり僞ではなく事實こう云ふものがあるとして、其の上に科學的なり哲學的なりの說明を加へたらよからうと思ふ。眞如でも不生不滅でも其の儘に體得するので

あつて、本不生は生死を考へての事ではない、さう感じたものを其の儘出す如實の世界そのものである。此の上に般若、華嚴等の理屈をつけてもいゝが、然しもとがなければならぬ。其のもとを私は宗教的基礎と云ふのである。

こんなやうなことを漠然と感じたり考へたりして見ると、何だか法身だけではいかず、又應身の外に報身と云ふものがあつて、此色身を捨てるか、或は此色身がそのままに、超色身のものにかはつて、好いやうに思ふ。而して此思ひは輕るはずみのものでなく、深く人の心の底に潜んで居ると考へたい。